神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ通信
第 41 号
2023 年 3 月 20 日発行
年 2 回発行
神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

子どものための コンサート・シリーズ
クリスマス・コンサート

「子どものためのクリスマス・コンサート～あわてんぼうのクリスマス～」（「子どものためのコンサート・シリーズ」第六十二回）を十二月十日（土）に本学講堂で開催しました。（第一部十一時開演、第二部十五時半開演、各六十分、来場者数・第一部四百五十七名／第二部四百九十四名、計九百五十一名）。

出演は別所香穂（声楽）、反田沙耶（アウトリーチ履修十八期生／クラリネット）、竹ヶ鼻智絵（ピアノ）のアンサンブルグループ「Ｐｉａｎｅｔａ（ピアニータ）」に、ゲストとして勝間田萌（同十八期生／ピアノ）を加えた四名です。

オリジナルで物語を考え、その登場人物の感情や行動に合わせて選曲しました。飽きずに分かりやすく音楽を感じてもらうことを一番の狙いとし、音楽を聴くだけでなく目や身体を使って楽しむことや、声楽・クラリネット・ピアノをより知ってもらうことなども意識しました。会場内には、創造したキャラクター（制作：別所）をプロジェクターで投影し、舞台上ではお話の中で出来上がるクリスマスツリーを、実際に作りながら進めました。

会場が暗くなり音楽の始まりとともに幕開けです。讃美歌〈もろびとこぞりて〉をピアノ連弾で華やかに演奏すると、コンサートを楽しみにしてくれていた子どもたちの楽しげな声が聞こえてきました。お話はクリスマスの前日、主人公は元気な女の子ルーシー。ツリーの飾りが何もできていないことに慌てたルーシーは、飾り探しの旅へ出かけます。旅が始まる前にクラリネット紹介として、シュライナー作曲「だんだん小さく」を演奏しました。楽器がだんだん分解され小さくなっていく姿に、会場ではどよめきと拍手が起こりました。グノー作曲歌劇《ファウスト》より〈宝石の歌〉では、共に飾り探しを手伝うお友達、ジェシカのツリーに飾られた「たくさんの宝石」を歌で表現しました。アンゲラー作曲〈おもちゃの交響曲〉より第一楽章では、たくさんの楽

器を登場させました。これから始まる飾り探しのわくわくを、ヴァイオリンや、ハンドベル、リコーダー、鈴などの打楽器を用いて、視覚的にも楽しめるよう、実際にお芝居を交えながら演奏しました。ショパン作曲〈革命〉では、ルーシーとジェシカが旅の途中で出会ったお菓子屋さん（ララさん）の大切な鞄が飛ばされて泣いている様子を迫力のピアノソロで伝えました。そんなララさんを助けるために、会場のお客さんも一緒にアクティビティにチャレンジしました。ロジャース作曲の映画《サウンド・オブ・ミュージック》より〈ドレミのうた〉に合わせて身体を動かすと大盛り上がり！歌詞に出てくる「ドレミファソラシド」の音に合わせて足元から頭の上まで身体全体を使って音階をたどりました。テンポが上がるとより一層むずかしくなり、親子揃って懸命に取り組む姿に、会場全体が一つになる様子を感じることができました。こうして元気を取り戻したララさんの喜びを、中川ひろたか作曲《にじ》で表しました。この曲の歌詞にある「きっと明日はいい天気」とリンクさせ、喜びを伝えました。クライスラー作曲〈愛の悲しみ〉では、大事なお花が咲かず悲しんでいるお花屋さんのフラーさんの気持ちを表現しました。ネッケ作曲〈クシコス・ポスト〉では、飾りを手に入れるため急いで目的地まで向かっている様子をピアノ連弾で演奏しました。ついに最後の飾り、お星さまを手に入れるためには「素敵な音楽が必要」とし、村松崇継作曲〈彼方の光〉を演奏しました。無事にお星さまを手に入れたルーシーとジェシカは、素晴らしいクリスマスツリーを完成させました。プログラムの最後には、《クリスマス・メドレー》を演奏し、皆に素晴らしいクリスマスが訪れることを願い、幕を閉じました。

　今回のコンサートでは、コロナ禍以来約三年ぶりに楽器体験が復活しました。たくさんの子ども達が一生懸命に楽器に夢中になる姿がとても印象的でした。

　多少の制限はあったものの、従来の定員数まで引き上げた開催であったため、舞台からは多くの笑顔を見ることができました。私たち「Ｐｉａｎｅｔａ」は活動を初めて二年目と僅かなグループです。これからたくさんの経験を積んでいく中で、今回のコンサートから多くの学びを得ました。今後の活動へもより一層力を入れて取り組んでまいりたいと思います。これから開催される子どものためのコンサート・シリーズが長く続いていくこと、そして一刻も早く制限のない演奏会が開催されることを心より祈っております。

（反田沙耶・記）

学外アウトリーチ

西宮市立高木幼稚園

十月二十八日（金）、高木幼稚園　二階ホールにて「秋の音楽会」を開催しました。（十時開演、園児・保護者約五十名）

演奏は稲葉彩萌（クラリネット）・高橋優佳（ピアノ）・田上優希（トロンボーン）の三名です。

今回は、秋にちなんだ曲を中心に選曲し、またアクティビティとして園児らの歌える曲も取り入れました。各楽器の楽器紹介を解説と演奏で見聞きしてもらい、楽器についての知識を深めてもらえる形にしました。

挨拶と自己紹介を終え、第一曲目に梁田貞作曲〈どんぐりころころ〉を演奏しました。事前に園児らが歌えると伺っていたので、園児たちにとって身近な音楽とともに秋の音楽会が始めました。ここから楽器紹介に移り、楽器について知識を深めてもらった後に、各楽器の演奏を聴いてもらいました。

第二曲目、三宅榛名作曲〈赤とんぼ変奏曲〉をピアノ独奏でお送りし、次にクラリネットで第三曲目、服部克久編曲〈クラリネットをこわしちゃった〉をお送りしました。この曲は、少しずつクラリネットを分解しながら演奏されます。「こんなに小さくなっても演奏できるんだ」という面白さを感じてもらえ、会場の盛り上がりは想像以上のものでした。第四曲目、團伊玖磨作曲〈ぞうさん〉をトロンボーン独奏でお送りしました。

第五曲目のモンティ作曲〈チャルダッシュ〉では、クラリネットの超絶技巧を楽しんでもらうことができました。その後、第六曲目にオッフェンバック作曲〈天国と地獄〉をトロンボーンが加わり三人で演奏しました。

第七曲目には久石譲作曲〈さんぽ〉を演奏しました。〈さんぽ〉は事前に園児たちが歌唱できると伺っていたので、歌詞カードを用意し園児には簡単な振り付けを一緒に踊ってもらいました。最後に平井康三郎作曲〈とんぼのめがね〉を演奏しました。この曲も園児たちに歌唱してもらいコンサートを締めくくることができました。

今回のコンサートでは、それぞれの楽器ごとのソロを聴き、楽器について知識を深めてもらいました。園児らと一緒に音楽を演奏することで、園児たちにも楽しんでもらえるコンサートを作り上げることができたと思います。

（田上優希・記）

スミリンケアライフ株式会社 エレガーノ西宮（四年生）

十月三十一日（月）スミリンケアライフ株式会社　エレガーノ西宮（兵庫県西宮市津門大塚町十一番五十八号）にて「芸術の秋に聴く　音楽の調べ」と題し、二部制で公演を行いました。（第一部：十三時三十分、第二部：十四時三十分　出演者：声楽・安永さくら、ピアノ・藤江未来、ヴァイオリン・鈴木ありあ、打楽器・藤野真由）

ディズニー音楽で幕開けし、懐かしい名曲や映画音楽、クラシックなど様々なジャンルの曲を取り入れ、参加型のアクティビティなどで音楽を楽しんでいただく事を目的にプログラムを構成しました。

初めに、華やかなメロディーがコンサートの幕開けに相応しい、ディズニー映画『美女と野獣』より〈ひとりぼっちの晩餐会〉を全員で演奏した後、しっとりと懐かしのＢＥＧＩＮ作曲〈涙そうそう〉をピアノと歌で演奏しました。続いて、楽器の魅力が伝わるようなクラシックを、ということでモンティ作曲〈チャルダッシュ〉をピアノとマリンバで、アザラシヴィリ作曲〈ノクターン〉をピアノとヴァイオリンで、それぞれ演奏しました。チャルダッシュでは、マリンバの音の多彩さを、ノクターンでは新しい作品の発見をお届けできたのではないかと思います。

続いて、中村八大作曲〈上を向いて歩こう〉では、音楽に合わせて一緒に歌いながらボディパーカッションを行うアクティビティを取り入れました。簡単な手拍子だけでなく、頭から膝まで叩く複雑なものも取り入れ、みなさまに口ずさみながら参加していただくことができました。

続いてマンシーニ作曲の、『ティファニーで朝食を』より〈Ｍｏｏｎ　Ｒｉｖｅｒ〉をピアノと歌、ヴァイオリンで演奏した後、最後に中島みゆき作曲〈糸・麦の唄〉を全員で演奏し、コンサートが終演しました。

今回、初めて老人ホームで演奏させていただくにあたり、プログラムの選曲や、アクティビティの内容など大変思案しました。今までの実習先である幼稚園とは、お客さまの反応や空気感、言葉遣いなど違いがたくさんあり、難しく感じた部分もありました。それでも「楽しかった」「また来てください」「今度はこの曲を」などと言ったお声から、楽しんでいただけたことを実感し、とても嬉しく感じました。

（鈴木ありあ・記）

西宮市立子育て総合センター付属あおぞら幼稚園

十一月十日（木）十時から西宮市立子育て総合センター付属あおぞら幼稚園（西宮市津田町三―四十、担当・堀内知愛先生）にて園児・乳幼児・保護者を対象とした「秋のコンサート」（四十分）を行いました（ヴァイオリン・鈴木ありあ、山田梨紗子、クラリネット・稲葉彩萌、ピアノ・高橋優佳、声楽・安永さくら）。

今回のコンサートでは、〈山の音楽家〉をメインテーマとして楽器を知ってもらいつつ、音楽を一緒に楽しんでもらえるようなプログラムを意識しました。

まずはじめに、クライスラー作曲〈シンコペーション〉をヴァイオリンで演奏後、「秋のコンサート」を意識して岡野貞一作曲〈もみじ〉を全員で演奏しました。

次に、アクティビティとして久石譲作曲〈さんぽ〉を、体を動かしながら歌いました。園児は〈さんぽ〉の歌詞を覚えてくれていたので、私たちに続き大きく体を動かしながらハキハキと歌ってくれました。続いて、コンサートのメインテーマであるドイツ民謡〈山の音楽家〉で、楽器の紹介とリズムのアクティビティを行いました。まず〈山の音楽家〉の本来の歌詞を変更してそれぞれが動物になりきり、順番に楽器紹介をしました。その後、園児にも〈山の音楽家〉の一員として手と膝を使った二種類のリズムを練習し、二つのグループに分かれてそれぞれのリズムを組み合わせ演奏しました。比較的簡単なリズムにしていたので、園児も曲に合わせて楽しんで演奏してくれました。

アクティビティ終了後は動物になりきったまま、ソロパートとして各楽器にフォーカスした曲目が続きました。まずヴィヴァルディ作曲《四季》より〈秋〉をヴァイオリン二重奏で演奏。園児たちは秋をテーマにしたクラシック曲を、耳を澄ませて聴いてくれました。その後、声楽のソロで坂田おさむ作曲〈ありがとうの花〉、クラリネットのソロでモンティ作曲〈チャルダッシュ〉をそれぞれ演奏しました。

ソロ終了後は再び秋の曲として、山田耕筰作曲〈赤とんぼ〉を全員で演奏しました。園児たちも口ずさんだり体を揺らしたりして聴いてくれました。〈赤とんぼ〉で終わると雰囲気が落ち着いたまま終わってしまうため、最後は中西圭三作曲〈ぼよよん行進曲〉を全員で演奏しました。演奏者が多かったので比較的音圧のある豪華な演奏になり、園児も喜んでいました。

今回の実習では園児との距離が近く、間近に楽しそうな反応を見ることができて楽しかったです。リズムアクティビティや知っている曲などは口ずさんでくれたり楽しんで聴いていただけてとてもうれしかったです。

（稲葉彩萌・記）

芦屋市立西山幼稚園

十二月十三日（火）、今回は芦屋市立西山幼稚園（兵庫県芦屋市西山町二十二番十五号）へ伺いました。テーマを『いろいろな拍子の音楽～二拍子、三拍子、四拍子！？～』とした四十分プログラムです（声楽・安永さくら、ピアノ・中村玲那、ヴァイオリン／ヴィオラ・鈴木ありあ）。

子どもたちの知っている、聴いたことのある音楽を取り上げ、「拍子」にフォーカスしました。「拍子」は音楽にどのような効果をもたらしているのかを知り、体感してもらうという目的でプログラムを組みました。

オープニングには、リズミカルで華やかな二拍子のロウ作曲〈踊り明かそう〉を三人で演奏しました。挨拶後、同じく二拍子のモーツァルト作曲〈トルコ行進曲〉をピアノとヴァイオリンで披露しました。

次に三拍子であるチャイコフスキー作曲《くるみ割り人形》より〈花のワルツ〉をピアノとヴァイオリンで演奏し、ワルツのリズムを体感してもらいました。続いて四拍子であるピアポンド作曲〈ジングルベル〉をなんと三拍子にアレンジして演奏しました。ここでは三拍子を体感させるアクティビティを取り入れました。ちょうど子どもたちは、生活発表会でリズム打ちをしていたらしく、みんな張り切って行ってくれました。

そして四拍子の異国的なリズムが特徴的なピアソラ作曲〈リベルタンゴ〉をヴァイオリンとピアノで演奏し、続けてシューマン作曲〈献呈〉を声楽、ヴィオラ、ピアノの三人で演奏しました。ヴィオラという名前を知っている子どもも多く驚きましたが、音色をお届けすることができとても喜んでもらえました。最後には《クリスマスメドレー》を三人でお届けしました。

異なる拍子で曲を準備し、子どもたちが体を使って体感できるよう工夫した点がいくつかあります。その中でも、（一）一拍目をいつもより目立たせて演奏する、（二）わかりやすいテンポに落とす、ということを特に意識しました。企画の時点では苦戦した点も多々ありましたが、当日は子どもたちが生き生きと真剣な眼差しで積極的に参加してくれたので、とても楽しい時間となりました。

（中村玲那・記）

雲雀丘学園小学校

十二月十五日（水）、雲雀丘学園小学校（宝塚市雲雀丘四―二―一）にて五年生クラスを対象とした実習（各四十五分）を行いました。（声楽・安永さくら、ヴァイオリン／ヴィオラ・鈴木ありあ、ピアノ・中村玲那）。

「いろんな拍子の音楽　～二拍子・三拍子・四拍子～」をテーマに、拍子を感じながら音楽に親しめることを目的としてプログラムを組みました。オープニングはミュージカル《マイ・フェア・レディ》より〈踊り明かそう〉を演奏しました。その後は今回のねらいである、拍子についての説明を入れながら、コンサートを進行しました。二曲目は二拍子の音楽、モーツァルト作曲〈トルコ行進曲〉をピアノとヴァイオリンで演奏し、同じ編成で三拍子、チャイコフスキー作曲《くるみわり人形》より〈花のワルツ〉を演奏しました。

さらに拍子に親しんでもらうため、雲雀丘学園の校歌を本来の四拍子から、三拍子と五拍子で演奏しました。児童たちは、馴染みのある校歌が違った拍子で演奏されることに、とても食いついている様子でした。そしてこの校歌を使ってアクティビティも行いました。まずは全員で四拍子の指揮を振り、拍を感じてもらいました。次に一人が指揮者役になり、自由な速度や強弱で指揮を振り、他の生徒たちはその指揮通りに歌いました。一生懸命参加してくれ、各クラスとも個性的でおもしろい校歌の合唱となりました。

モーツァルト作曲《魔笛》の二重唱〈パ・パ・パ〉では、音楽教諭の岡村先生が助演してくださいました。この曲は授業でも取り扱っていたらしく、先生の歌う姿に生徒たちは興味津々でした。次に三拍子、シューマン作曲〈献呈〉を声楽とピアノに加え、男声を意識し、ヴィオラで演奏しました。最後は今まで出てきた拍子を盛り込み、クリスマスメドレーで締めくくりました。

今回の実習では四公演が連続であったことがむずかしかったのですが、聞き手にとっては一回の機会であると実感しました。生徒たちの楽しそうな様子を胸に、今後も一回一回を大切に演奏していきたいです。

（安永さくら・記）

雲雀丘学園小学校

十二月十四日（水）、雲雀丘学園小学校（宝塚市雲雀丘四―二―一）にて、アウトリーチ・コンサート（各四十五分）を行いました（クラリネット・稲葉彩萌、トロンボーン・田上優希、ヴァイオリン・山田梨紗子、ピアノ・高橋優佳）。対象は、雲雀丘学園小学校の四年生（三十六名×四クラス）と教員二名でした。

今回は、「楽器ハカセになろう！」というテーマで、私たちの演奏する四つの楽器の魅力を知ってもらうことがねらいでした。

挨拶と自己紹介を終え、小学校の皆さんと初めましての気持ちを込めて、E.エルガー作曲〈愛の挨拶〉を演奏しました。この曲は、小学校のチャイムに使われているようで、「聴いたことある！」と喜んでいただきました。

続いて、楽器紹介とそれぞれの楽器がメインになる曲を演奏しました。ピアノでは、元々はオーケストラの曲である、S.プロコフィエフ作曲バレエ《ロミオとジュリエット》より〈モンタギュー家とキャピュレット家〉を演奏し、ヴァイオリンでは、弓を使わない「ピッツィカート奏法」を用いた、L.ドリープ作曲〈ピッツィカート〉と、L.アンダーソン作曲〈プリンク・プランク・プルンク〉を演奏し、トロンボーンでは、トロンボーンならではの「グリッサンド奏法」を活かしたO.レスピーギ作曲交響詩《ローマの祭り》よりトロンボーンソロの抜粋と、アメリカ民謡〈聖者の行進〉を演奏し、クラリネットでは、楽器を分解しても演奏できるのかを検証するため、フランス民謡〈クラリネットこわしちゃった〉を演奏し、トロンボーンでも用いた「グリッサンド奏法」を活かした、G.ガーシュウィン作曲〈ラプソディー・イン・ブルー〉を演奏しました。クイズや質問を交え、時には大変盛り上がる瞬間もありました。

最後は、クリスマスにちなんだ曲、アンダーソン作曲〈そりすべり〉で締めくくりました。生徒の皆さんは、終わってから質問や楽器を見に来てくれたり、興味深く聴いて下さり、とてもうれしかったです。また、このコンサートをすることで、私たちにとっても専攻の楽器の魅力を再発見するよい機会になりました。改善点もありますが、私たちが思う楽器の魅力はしっかりと伝えることができたのではないかと思います。

（高橋優佳・記）

芦屋市立宮川幼稚園

十二月二十一日（水）、芦屋市立宮川幼稚園（兵庫県 芦屋市浜町一番二十号）にて、「いろんな拍子の音楽～二拍子、三拍子、四拍子！？～」と題し、午前十時から四十分間のコンサートを行いました(声楽・安永さくら、ピアノ・中村玲那、ヴァイオリン／ヴィオラ・鈴木ありあ)。

直近に実施した小学校のアウトリーチ・プログラムを幼稚園児向けにアレンジしました。映画音楽やクラシック音楽、クリスマスの曲を使い、説明を交えながら拍子について触れてもらうことを目的にプログラムを構成しました。

初めに、映画『マイ・フェア・レディ』より〈踊り明かそう〉を全員で演奏し、楽しく明るいコンサートの始まりをつくりました。

次に二拍子の説明をしたのち、歩くような拍子を感じてもらうため、W．A．モーツァルト作曲〈トルコ行進曲〉をピアノで演奏しました。続いて三拍子の音楽では、P．チャイコフスキー作曲バレエ音楽《くるみ割り人形》より〈花のワルツ〉をピアノとヴァイオリンで演奏し、ワルツの踊りを紹介しました。

続いて、クリスマス・ソングの〈ジングルベル〉を使い、よく知っているこの曲は何拍子でつくられているかクイズをしました。拍子の違いによるおもしろさを伝えるため、三拍子のワルツ風ジングルベルも演奏しました。拍子を体感してもらうために、園児には手と膝を使ったボディパーカッションで参加してもらいました。

次に、三拍子と四拍子の違いをもっと感じてもらうために、四拍子の舞曲、A．ピアソラ作曲〈リベルタンゴ〉を選曲し、ピアノとヴァイオリンで演奏しました。

その後、大きな三拍子を感じてもらうため、R．シューマン作曲〈献呈〉を全員で演奏しました。この曲では楽器にも関心と知識を持ってもらうためにヴィオラを加えた編曲にしました。ヴァイオリンとヴィオラを並べて比べてもらい、楽器の説明をしました。最後に、コンサートで出てきた三つの拍子が登場するクリスマス・メドレーを全員で演奏し、終演しました。

今回は小学校のプログラムを使ったため、内容が少しむずしいか懸念していましたが、説明の言い回しやコンサートに参加してもらう方法などを工夫し、園児にも伝わりやすいコンサートになったのではないかと思います。園児からは終演後に歌のプレゼントもいただき、一年の集大成といえるアウトリーチ・コンサートとなりました。

（鈴木ありあ・記）

スミリンケアライフ株式会社
エレガーノ西宮（三年生）

一月十三日（金）エレガーノ西宮にて、「New Year Concert 二〇二三～アンサンブルの愉しみ～」を行いました。（ホールは、十三時三十分開演、介護居室は十四時三十分開演の各三十分）出演は、「音楽によるアウトリーチ（講義）」を履修している三年生七名です（フルート・芦沢梨里沙、クラリネット・野山真歩、声楽・北村理子、ピアノ・金悠雅、冨田萌絵、平野里奈、山田詩織）。

アンサンブルをテーマに公演を行い、きいてくださっている方々に音楽を楽しんでいただけるよう工夫しながらプログラムを作成しました。

初めに、お正月らしく、宮城道雄作曲の〈春の海〉をフルートとクラリネットで演奏した後、ヴェルディ作曲のオペラアリアより〈慕わしい人の名は〉を歌とピアノで演奏しました（ホール公演のみ）。次に、清塚信也編曲の〈チャルメン〉をピアノ連弾で演奏し会場を魅了した後、岡野貞一作曲の〈ふるさと〉を歌、フルート、クラリネット、ピアノで演奏しました（介護居室では、フルート、クラリネット、ピアノのみ）。ホール公演では手を使うアクティビティを行ったのですが、みなさん積極的に参加して下さったり、口ずさんでくださったりと、盛り上がりました。次に雰囲気をガラッと変え、出演者（山田詩織）が編曲をしたショパン作曲の〈ノクターン第二番〉をフルート、クラリネット、ピアノで演奏しました。その後、W.A.モーツァルト作曲の《ピアノソナタ第十七番変ロ長調》より第三楽章をピアノで演奏し、最後にシュトラウス作曲の〈ラデツキー行進曲〉を出演者全員で演奏しました。きいてくださっている方々も強弱をつけながら一緒に手拍子をして下さり、とても楽しい公演となりました。

今回初めての実習で不安なこともたくさんありましたが、みんなで協力して完成させることができ、多くの方に楽しんでいただけたと感じます。実際に職員の方々にもお褒めの言葉をいただきとてもうれしく、満足度の高い公演ができました。

（芦沢梨里沙・記）

履修生紹介

四年生（二十一期生七名）からのメッセージ

稲葉　彩萌（クラリネット）

三回生の時に履修した座学でのアウトリーチでは幼稚園などの施設で演奏する、といった漠然としたイメージしかなかったのですが、四回生になり実習が始まってからはアウトリーチということについてやっと理解することができました。年齢や季節に合わせて選曲し限られた楽器の編成の中でいかに子どもたちに楽しんでもらえるか考えるのは大変でしたが、とても楽しかったです。

特に後期は一つの本番が終わると次の本番がすぐにあるという状況で準備もギリギリになってしまったことが多かったので、パターン化してどの本番にも大体の枠組みを作っておくことが重要だと思いました。

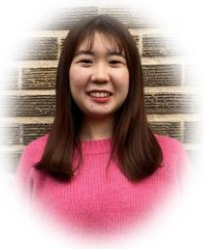
中村　玲那（ピアノ）

アウトリーチを受講し実技を披露する経験を経て、視野が広がり幅広い教養を得ることができました。現場によって空気感は全く違うもので、そこから生まれる本番はかけがえのない瞬間でした。経験を重ねるごとに演奏だけでなく、私たちの対応力も鍛えられていきました。プログラムの構成から舞台配置、進行の展開まで決めることが多く、大変であったが、その分やりがいと達成感が大きく味わうことができ、次に向け意欲的に進めることができました。毎度、反省点は多かったですが、その分見つめ直すことができ、チーム一体となって成長していくことができました。わたしにとって、かけがえのない経験ができ大きな能力を身につけることができたと実感しています。

鈴木　ありあ（ヴァイオリン）

私は中高の部活時代、慰問演奏に伺う機会が毎年あり、そこでは例年決まったプログラムで、普段の演奏と同じような心持ちで演奏していました。しかし、大学でアウトリーチの講義を受け、誰に何をどう届けるのか、アウトリーチの根底にある意味について学び、音楽を届けることに対しての考え方が変わったように感じています。六月に初めて行った幼稚園の実習では、プログラムの構成から何も分からない状況でしたが、園児のみなさんのキラキラした目を見てとても充実感を覚えました。七夕コンサートやケアホーム、幼稚園や小学校などたくさんの実習を通して、経験豊富な先生方にフィードバックをいただき、普段の授業やレッスンだけでは学べない貴重な学びが沢山ありました。音楽との向き合い方を考える場を作ってくれた授業だったと考えています。

髙橋　優佳（ピアノ）



私はアウトリーチの授業で、コンサートを作り上げるために必要なノウハウを学ぶことができたと思います。一年間の履修期間で、学内での『子どものための七夕コンサート』や幼稚園、小学校での実習があり、プログラムの組み方や進め方、ＭＣでの話し方、演奏での魅せ方などを実践的に学ぶことができました。

はじめは手探り状態で、やり遂げる事に精一杯になってしまっ

ていることもありましたが、回を重ねるごとに、「どんな風にしたら対象の方々に楽しんでもらえるのか」や「これを伝えたい！知ってもらいたい！」と思う事も増えて、私自身も心から楽しんで取り組めるようになりました。

振り返れば、大変で、心が折れそうになることも多々ありましたが、それ以上に得るものが多く、本当に履修して良かったと思います。今後も、ここで得たものを活かし、良い音楽を届けられるよう、精進していきたいと思います。

田上　優希（トロンボーン）

アウトリーチの授業では、学生が主体となり演奏を聴いてくださる対象の方に対し、どのような目的でコンサートを行うのか、司会進行や選曲を考えました。演奏を聴いてくださる方々にいかに楽しんでもらうか、理解してもらえるかということを常に考えながら履修している友人と話し合い協力しあって本番を作り上げることができました。

作り上げることのできた本番はとても新鮮で、今までの用意された本番の有り難みを知るよい機会にもなりました。

アウトリーチ活動をする中で特に難しいと感じたのは、園児らに対してどのような企画が楽しんでもらえるのか、反応が全くわからなかったことです。演奏をする機会が今までなかったということもあり、はじめは苦労しました。実際想像以上に反応がよかったものもあれば、反応がよくなかったものもあったので、これからもさらに工夫し楽しんでもらえるコンサートを作り上げたいと思いました。

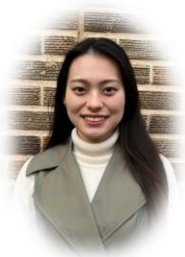
山田　梨沙子（ヴァイオリン）

アウトリーチの授業を通して、会場全体が一体となり聴き手に音楽を楽しんでいただくためには、演奏の技術だけではなく選曲や構成の工夫も大切であることを学びました

音楽を様々な方向から考えることで新たな発見があり、音楽に対する視野が広がりました。

一から演奏会を作り上げるのは大変なこともあったのですが、お客様の笑顔を見るたびにとてもうれしい気持ちになり大きな励みになりました。聴き手の反応を身近で感じることで、音楽の持つ力や可能性を改めて実感できました。

アウトリーチでしかできない貴重な経験をたくさんさせていただきました。実習を支えてくださった方々に心より感謝しております。



安永　さくら（声楽）

人前で演奏する際には、常に聴き手目線で考えるようになりました。アウトリーチの活動においては、なによりもこれが大切な考え方であると思います。対象者に合わせて、コンセプトや曲目を練り、考える時間に多くを費やしました。引き出しの乏しさや想定不足で、思い通りにならないことも多々ありました。しかし学生のうちにこれらの経験ができたことは、とても有難く、反省点も今後の糧にしていきたいと思っています。アウトリーチ実習は、大学生活の学び全てが繋がる授業でした。皆さんも是非履修し、更に沢山の学びや気づきを得られることを祈っています。

「音楽によるアウトリーチ（講義）」履修生（三年生七名）

ピアノ　平野里奈、金悠雅、富田萌絵、山田詩織

声楽　北村理子

クラリネット　野山真歩

フルート　芦沢梨里沙

講師　谷田　奈央

アウトリーチ要員からのメッセージ

向井　千沙都さん（十七期生）

今年度、アウトリーチ要員として勤務させていただきました。本学のアウトリーチを長年育ててくださった津上先生がご退任され、稲本先生率いる新体制の記念すべき一年目にご一緒できたことを光栄に思います。先輩方が培ってきた伝統を継ぎながら、型に捉われすぎず新しいアイデアを取り入れていく新体制の第一歩となりました。

二〇二一年度には実習が行われなかったこともあり、今年度の学生たちは通常三回生で行う実習見学が出来ないまま手探りのスタートとなりました。そんな中、二年ぶりの通常開催となった七夕コンサートを全員で立派にやり遂げた経験は、何よりも彼女たちの自信に繋がったと思います。

後期には、社会に出てからの活動を見据え、二つのグループに分かれて実習を行いました。楽器編成の違いやトークの雰囲気など、それぞれの特色がよく活かされていました。各グループが自分たちでよく考え、工夫した結果だと思います。アプローチの仕方、プログラムの組み方には無限の可能性があるのだと私自身改めて感じました。

学生たちが実習を通して見つけた自分たちなりのやり方や信念を大切に、これからも活動していってくれることを願っています。

特別講義
レ・フレール斎藤守也さん

「自分がもう一人欲しいと思うぐらい、色んな所を回りたくなることはありますね。嫌な思い出……何かあったかな。うーん、ないです！」

アウトリーチ活動をする中で辛かったことはありますか？という学生からの質問に、斎藤氏は笑顔で言い切った―

二〇二二年一一月一一日（金）一限目、一台四手連弾というプレイスタイルを持つピアノデュオ、レ・フレールの斎藤守也氏をゲストティーチャーに迎えた講義「音楽と心のバリアフリー音楽家が手掛けるアウトリーチそしてその先」。

斎藤氏はプロとして音楽活動をする傍ら、病院、福祉施設での訪問演奏や、バリアフリーコンサートをプロデュースするなど、ライフワークとしてアウトリーチ活動を精力的に行っている。

授業の初め、稲本先生が斎藤氏のレ・フレールとしての活動を、舞台映像と共に学生たちに紹介。息つく暇もないほどの熱い演奏を食い入るように見つめる学生たちの様子がとても印象的だった。

その後ＺＯＯＭを繋ぎ、斎藤氏から話を伺った。

斎藤氏がアウトリーチ活動を始めたきっかけは、医療機関や社会福祉施設で必ずと言っていいほど目にした、ピアノの存在だった。

「ピアノがあって、音楽が好きな子が大勢いて、ピアノを弾ける僕がいて……。なんで弾かないんだろうってすごく不思議に思った。」

その想いがきっかけとなり、それらの施設で演奏を始めたそうだ。

「彼らは、僕がプロであろうがボランティアであろうが、レ・フレールであろうが素人であろうが関係ない。目の前の音楽が楽しければ喜んでくれる。それは音楽家として自信をもらえます。」

さらに、斎藤氏が手掛けるバリアフリーコンサート「小さき花の音楽会」について伺った。

「音楽に触れる機会の少ない子どもたちに音楽を届けるという意味だけであれば、僕が訪問演奏をすればいい。でも、それ以上に社会の中で生きづらさを感じている子どもたちに、コンサートという〝社会〟に参加してもらいたかった。」と斎藤氏は語る。

「少しの移動も彼らにとっては大変なこと。でも、チケットを買って、その日を楽しみにして、会場まで足を運んで、ドキドキしながら開演を待って、音楽を楽しんで、余韻に浸りながら家に帰る……。そんな僕らにとってごく当たり前のことを、彼らに経験してほしいと思った。それがコンサートのプロデュースを始めたきっかけです。」

斎藤氏はこのコンサートに関して「自分の目の届く範囲で行う」ことを徹底している。

自ら会場の下見に行き、トイ

レの数やエレベーターの大きさ、駅から会場までの動線、会場内の段差などを把握し、対象にする子どもたちやスタッフの配置、演出などを考える。演出も、映像や照明を通常のコンサートよりも多く取り入れ、視覚的にも楽しめる工夫をしているそうだ。

「守也さんにとって音楽と心のバリアフリーとはどのようなものですか？」という稲本先生の問いに対し、斎藤氏はこう答える。

「僕は、音楽そのものが心をバリアフリーにしてくれるものだと思っています。音楽を聴くだけで、感情が解放されて心がバリアフリーになる。」

さらに斎藤氏は続ける。

「音楽をやっているとどうしても評価がつきまとう。でも何より大事なのは目の前の人の反応だと僕は思うんです。言葉や点数はすぐに変わるし、嘘やお世辞だって言えてしまう。でも目の前で聴いてくれる人の顔。あれに嘘はない。僕自身が心をバリアフリーにして音楽に集中し、それにお客さんが共鳴してくれる。僕が音楽を楽しんでいると、それが音に乗って聴く人に届く。そんな音楽を通したコミュニケーションが取れているんじゃないかなんて、勘違いかもしれませんが僕はそう思っています。そしてそれが勘違いでないと思えるのは、目の前の人の楽しそうな顔や、感情が動いている顔なんです。」

講義中、斎藤氏が繰り返していた言葉で特に印象に残っているのは、「楽しみ方は一人一人違う」ということ。楽しんでいることを表現するかどうかは人による。「歌おう」と伝えても、歌うか歌わないかはその人次第だ。「一緒に楽しもう」と言っても、一緒に楽しみたい人もいれば、一緒に楽しむのが嫌な人もいる。演奏する側が楽しませようと意気込んでしまうと〝一緒に〟楽しみたくない人を置き去りにしてしまう。斎藤氏は子どもの反応を想定せず、「今日の子はどんな反応をするだろう？」とフラットな気持ちで、その日会場に来た子どもたちと音楽を通してコミュニケーションを取っているそうだ。

講義中、斎藤氏から発されたメッセージには、まるで自分の隣に立って自分と同じ目線で世界を見てくれているような、フラットであたたかな想いが詰まっていた。

そんな彼の想いが音に乗って会場を包んでいる「小さき花の音楽会」は、きっとあたたかく優しい空間であることだろう。

練習室で音楽に向き合う日々の中では、つい忘れてしまいそうになる〝音楽の芯〟について改めて考えさせられた、密度の濃い講義だった。

（櫻本麻衣・記）

2022 年度　実習歴

6月　9日　（木）　西宮市立門戸幼稚園アウトリーチ
7月　2日　（土）　子どものための七夕コンサート（シリーズ第61回）
10月28日　（金）　西宮市立高木幼稚園アウトリーチ
10月31日　（月）　スミリンケアライフ株式会社エレガーノ西宮アウトリーチ（4年生）
11月10日　（木）　西宮市立子育て総合センター付属あおぞら幼稚園アウトリーチ
12月10日　（土）　子どものためのクリスマス・コンサート（シリーズ第62回）
12月13日　（火）　芦屋市立西山幼稚園アウトリーチ
12月14日　（水）　雲雀丘学園小学校4年生アウトリーチ
12月15日　（木）　雲雀丘学園小学校5年生アウトリーチ
12月21日　（水）　芦屋市立宮川幼稚園アウトリーチ
1月13日　（金）　スミリンケアライフ株式会社エレガーノ西宮アウトリーチ（3年生）
2月23日（木・祝）子どものためのオルガン・コンサート（シリーズ第63回）
3月　8日　（水）　芦屋市立小槌幼稚園アウトリーチ

音楽をお届けします！！

「アウトリーチ」とは、「一歩踏み出すこと」「手をさしのべること」。
大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にすてきな音楽のプログラムをお届けします。

♪幼稚園・小中学校へ：総合的学習支援プログラムとして、子どものための楽しい体験学習を！

♪病院や美術館へ：催しの趣旨に沿った手作りの音楽プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…
神戸女学院大学音楽学部 アウトリーチ・センター（火～金　10:00～15:00）
〒662-8505 西宮市岡田山 4-1　　TEL: 0798-51-8584　FAX: 0798-51-8551
E-mail：outreach@mail.kobe-c.ac.jp　https://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/

編集後記

スタッフの視点からアウトリーチを見つめられた貴重な１年目でした！来年度もよろしくお願いします！（廣瀬）
笑顔と元気を大切に、来年度もセンターのパソコンに向かいたいと思います！（櫻本）
５年間たくさんのことを学ばせていただきました。これからのアウトリーチも応援しています♪（丹野）
素晴らしい学生、スタッフと共に過ごせた最高の一年でした！（稲本）